

Ragin, Charles C., 1994, *Constructing Social Research* Chapter 1 to Chapter 4

人文社会系研究科社会文化研究専攻社会情報学コース 修士課程三年
21-36133 坂崎基彦 (hybrid@lumix.net)

まず、本書の第一章から第三章までを通読した感想を短く述べると、社会科学分野での研究を行うにあたって必要な概念や手続、その注意点を多くの具体例を交えながら解説しており、非常に好感が持てた。特に冒頭で「社会科学者も社会の中の存在である」という点を肝に銘じておかねばならないと説明するなど、これまで日本では大澤真幸の「第三者の審級」という用語を用いて小難しく説明されていた部分が簡潔にまとめられており、研究者の卵にとっては親切、かつ適切な表現であった。また、第二章で説明されている七種類の目標も、研究を進める上で目標を見失いがちになる研究者の卵にとっては、何度も読み返して確認する価値のある内容であると言える。

ただ、私の関心分野がオンライン空間での人間行動にあるため、ラジンの説明する方法論、目標、そして手法では不足している点も多いように思われる。それは以下のようにまとめることができる。

- (1) **空間の二重性の問題**……オンライン空間における人間行動は、オフライン空間における人間行動と完全に関係を持たないわけではない。オンライン空間における人間行動を研究する際には、オフライン空間での人間行動を少しであれ把握しておく必要がある。オンライン空間の研究をするにあたって（例えばあるコミュニティサイトなどにおける研究）自分がオンライン空間に存在していることを自覚しなければならないのか、それとも研究時にはオンライン空間に存在していないことを楯にとって、完全なる客観性持ち、「第三者の審級」から観察してしまってもよいのか、ラジンの説明だけでは不足である。
- (2) **バイアスの問題**……第二章の最後で、全ての社会調査者はバイアスから逃れることはできないと説明しているが、扱うケースが少ない（場合によってはひとつのケースのみを扱う）質的研究の場合、その手法を詳細に説明した第四章ではバイアスについての記述が出てこない。質的研究の場合であってもサンプルがバイアスを帯びている（サンプルを選択する段階で不可避免的にバイアスが含まれてしまう場合がある）場合が散見されるように思われるが、これに関する言及が不足している。オンライン空間を研究する際、ある特定のコミュニティサイトである特定の活動をしているメンバーをサンプルとして選んだ場合を考えてみよう。本人は「オンライン空間での人間存在」としての「縛り」しかかけていないつもりでも、実際には、オンライン空間で活動をするような人々はオフライン空間では社会に疎外されている人々であるかも知れないし、他に何かの共通点を持っているかも知れない。このような面はラジンの説明する方法論では見えてこない。本書86ページでは人間関係をたどってサンプルを集める手法が紹介されているが、それではますます、本人の気付かないバイアスの罠に陥ってしまわないだろうか。
- (3) **仮説の迫害**……本書85ページで言及されているが、質的研究では何かの理論を確認することは稀であり、見解やアイデアを展開するために用いられるとされている。しかしながら、これまでの新たな仮説を証明・立証、または既存の理論（同じく質的研究によって立てられた理論）を反証するために質的研究が行われる場合もあるのではないだろうか。ラジンはこの点にも言及していないし、まさにこれは自分自身にとっての問題でもある。